

図 11. 南城子 (5 万分 1 地形図「威遠堡門」・「大慶陽」図幅)

原図×0.66。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

当時ロシア軍は、第一軍は伊通、葉赫、掏鹿間に、第二軍、第三軍は公主嶺、奉化間に兵力を集中していた。その他は海龍城およびその附近、鄭家屯、遼陽窩棚附近に集中していた。それまでロシア軍は兵

力の増加を図り、5月中旬には兵力が約7万人に達した。日本軍総司令官の大山巖はこのことを知り6月6日、今後、日本軍の満洲北方への前進を容易なものにするため、占領地区を北に拡張することを各

軍に命じていた。その命令を受け、第四軍は6月9日、全面的に前進を開始していた。第十師団の右翼隊石田少将が率いる先進支隊は、凉水泉子の北方—南城子—下城子の高地に宿営していたロシア軍を攻撃したのである。ロシア軍の一、二中隊の抵抗はあったが、蓮花街方向に退却した(図12を参照)。こうして石田支隊は6月9日午後2時頃、凉水泉子北方より南城子を経て下城子に亘る高地に位置するロシ

ア軍の陣地を略取することになった(参謀本部1914a: 166-168)。

もうひとつの関連するのは、6月21日のロシア軍の蓮花街からの南下に関連する戦闘で、日本軍は南城子—凉水泉子北方の丘陵地帯から反撃し、歙喜嶺東方の高地(図10には等高線が一部しか描かれていない。「見取図」(歙喜嶺附近)(図13)を参照)にまでいたったものである(参謀本部1914a: 188-191)。



図12. 南城子附近第十師団右翼隊之戦闘(1905年6月21日)

原図(5万分1)×0.77。

出典: 参謀本部(1912)の附図第十八。

なお本図にも、当て字あるいは省略化されている集落名があり、鎮北 [zhenbei] を正白 [zhengbai] 堡、涼水泉子を涼水泉、孫家堡子を孫家と表記している。当て字されている集落名は中国語の発音が非常に似ている。

⑥ 「見取図」(歙喜嶺附近) (図 13)

本図の図示範囲は、⑤「見取図」(南城子付近) (図 10) の図示範囲に含まれる。本図は同じ位置を示した図 12 と比較しても、非常に簡略である。主要道路上の集落の位置はほぼ一致し、地名も記載するが、それ以外は省略している。また地形図では田や広葉樹林を表示しているのに対して、本図ではそれらが省略されている。道路も一部しか表示していない。これらの点から、本図は「目算測図」によると考えられる。

本図が作製あるいは使用された背景として以下のようなことが挙げられる (図 12 参照)。歙喜嶺は、1905 (明治 38) 年 4 月 3 日、第四軍の先進部隊である第十師団独立騎兵によってはじめて偵察が行われた。

4 月 3 日、第十師団独立騎兵は、秋山支隊が昌図北方の鶯鷺樹に向って前進していることを知り、それに相応して蓮花街 (歙喜嶺の北部) 附近のロシア軍の状況を搜索するため、威遠堡門を出発した。同日 16 時頃、歙喜嶺に到着し、露軍の歩兵約 150 人が蓮花街附近の高地にいることを確認し、歙喜嶺および茶棚庵附近に宿営した。日没頃には、蓮花街のロシア軍が退却していたため、歩兵第三十九聯隊第二中隊を蓮花街に派遣した。同中隊はロシア軍の抵抗を受けながら、20 時蓮花街を占領した (参謀本部 1914a: 29, 57)。

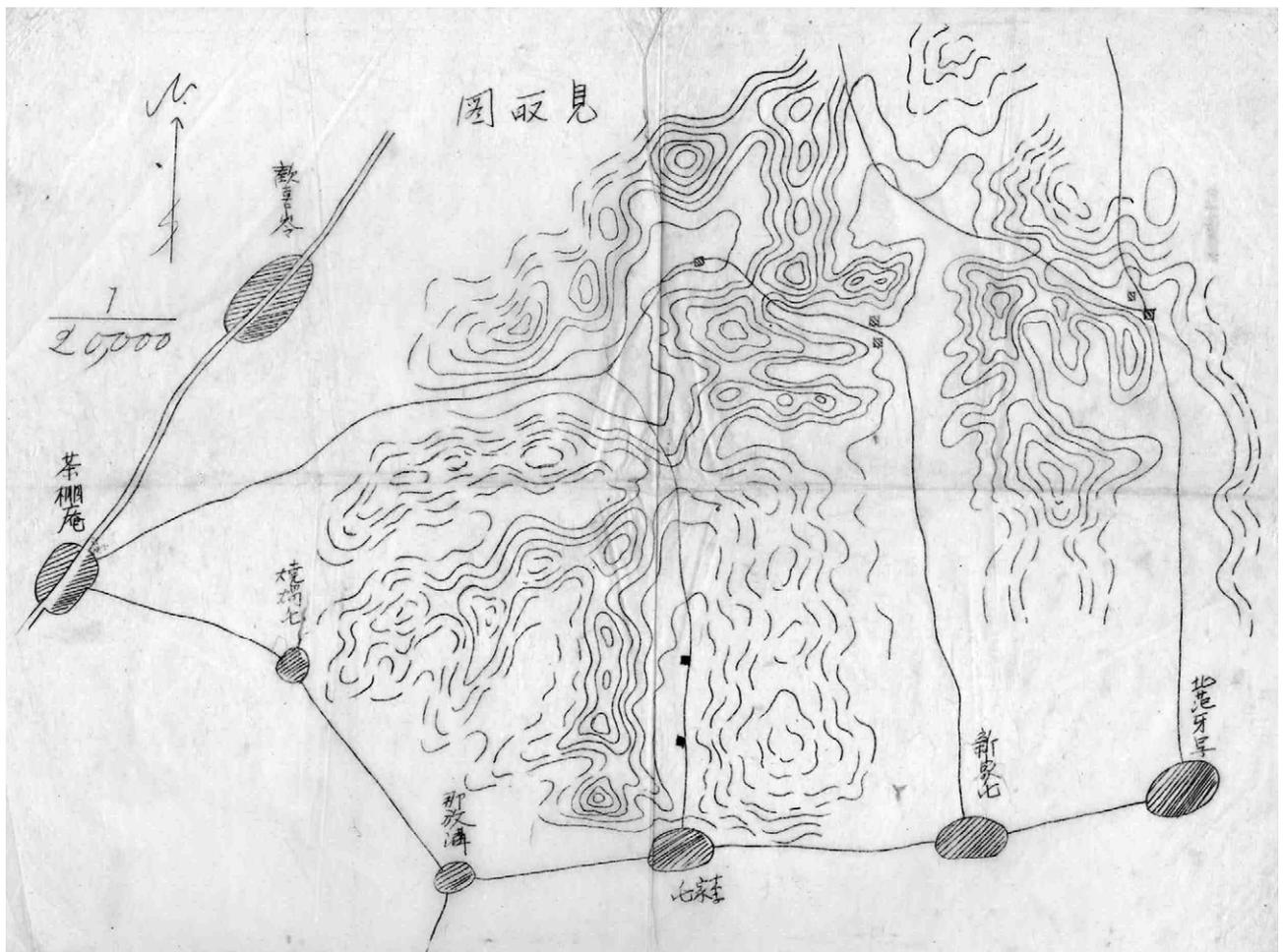


図 13. ⑥「見取図」(仮歙喜嶺) (2 万分 1)

原図×0.54。

その翌日、第十師団独立騎兵団は蓮花街から北進し、孤榆樹（⑩「孤榆樹附近目筈並記憶測図」にあらわれる孤榆樹とは別）を占領した。しかし、4月6日、掏鹿にいたロシア軍が西進し大青秧まで来ていたため、4月7日、第十師団独立騎兵団のほとんどは孤榆樹から南進し威遠堡門に戻っていた。

もうひとつは、上記4月21日の戦闘で、本図の中央部の丘陵地帯は、同日夕刻には日本軍が略取することになった地域である。丘陵地帯が主題になっているところから、この際に作られた可能性が大きい。あるいは、上記の偵察時に作成した図をこの

戦闘で利用した場合も考えられる。

⑦（断片）凉水泉子～神樹堡（図14）

もともと2枚以上の図を貼り合わせていたものの南端部で、南城子東方の凉水泉子～神樹堡付近を示す（図12参照）。本図が分離する前の図の中心はその北側の、上記歡喜嶺東方の丘陵地帯にあったと考えられ、その点からすれば、もとの内容は⑥「見取図」（歡喜嶺附近）（図13）と類似するものであったと考えられる。縮尺は5万分1前後と推定される。

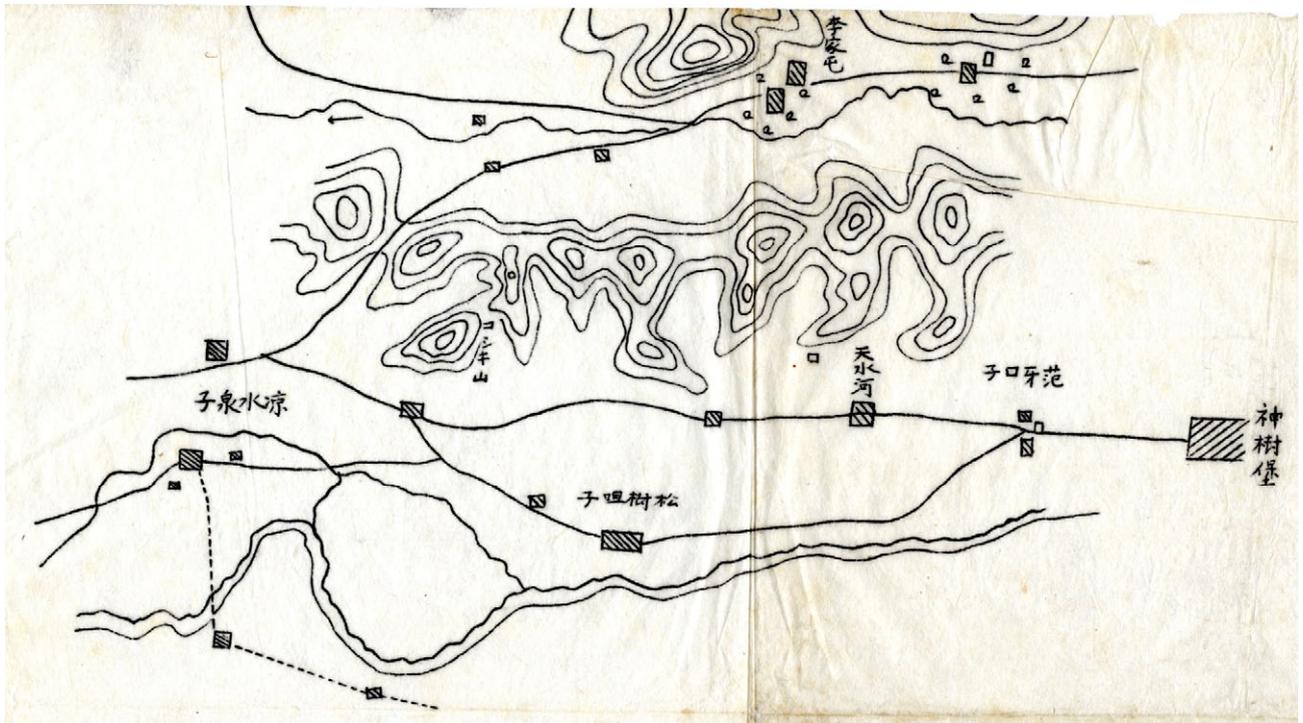


図14. ⑦（断片）凉水泉子～神樹堡

原図×0.75。

⑧ 「陶鹿附近略図」（図15）

本図の図示範囲は、⑤「見取圖」（南城子付近）（図10）および⑦（断片）凉水泉子～神樹堡（図14）の東側に当たる。対応する地域の地形図（図16）と比較すると、全体によく対応し、「路上測図」によるものと考えられる。掏鹿附近から西の、寇河に沿っている交通路とその近傍を表している。

本図が作製された背景として以下のようなことが挙げられる。掏鹿西方における搜索は二回ほど行わ

れていた。第一回目は、6月1日の第四軍石田支隊によるもので、第二回目は6月25日の第一軍第二師団によるものである。

第四軍の石田支隊は、6月1日威遠堡附近にあり、その騎兵第十聯隊は頭營子附近のロシア軍の状況を検索するため威遠堡門を出発した。同聯隊は、神樹堡の南部に位置する磊子溝に到着し搜索を行ったところ、ロシア軍は頭營子ではなく、西大青秧北方高地より神樹堡東北高地および范家牙口子北方高地に

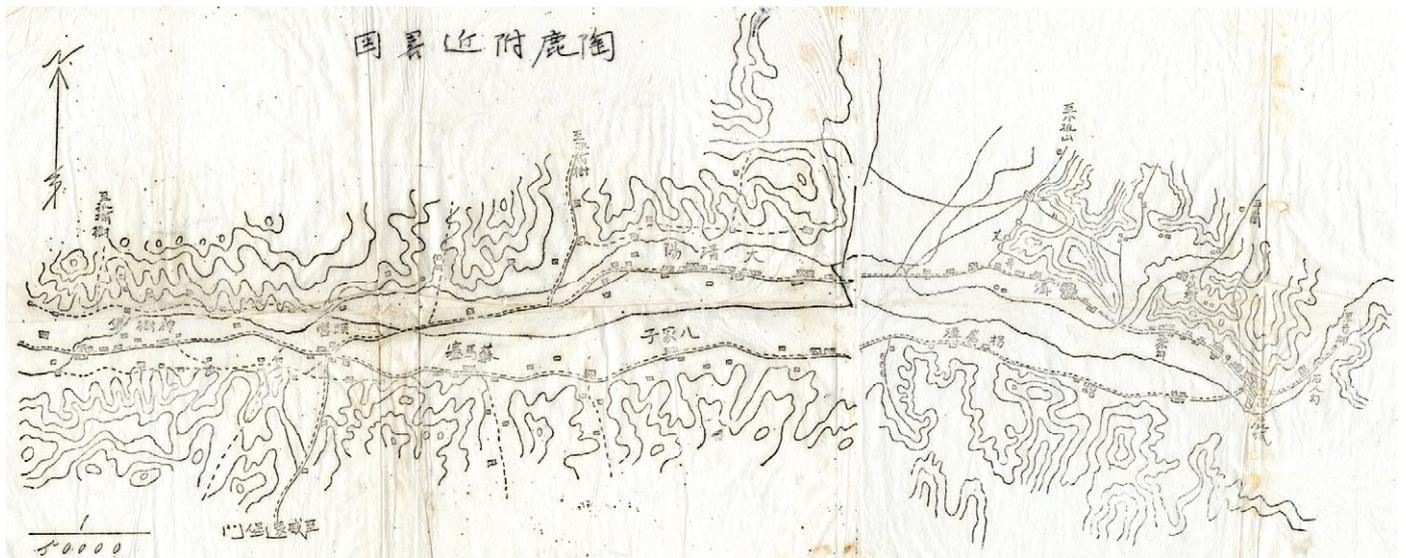


図 15. ⑧「陶鹿附近略図」(5 万分 1)

原図×0.37。



図 16. 掏鹿附近 (5 万分 1 地形図「大慶陽」図幅)

原図×0.47。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1933 年製版)。

あるということを確認した (図 11 参照)。その他、ロシア軍の歩兵約一小隊は西大青秧北方高地で防御工事をしているという情報を把握し、威遠堡門に戻った (参謀本部 1914a: 160-162)。

第二師団による掏鹿西方の搜索は 6 月 25 日に行われる。当時、第一軍第二師団長は今後の前進を考慮し、北方におけるロシア軍の状況および地形を調べるため、二つの支隊に搜索命令を出した。その中で南城子および掏鹿の東方附近で搜索活動を行ったのが歩兵中佐川崎寅三の率いる部隊である。その任務は下老虎林子附近のロシア軍の状況を搜索しかつ馬道嶺、大湾溝附近の地形を偵察することである。川崎中佐の率いる部隊は頭営子のロシア軍の監視兵

を駆逐して午前 8 時 40 分、頭営子の北方高地を略取した。この時、柳樹河子西北高地よりロシア軍の歩兵約一小隊の射撃を受けるが、西大青秧北方高地、大湾溝附近、南溝の南方高地の線にロシア軍の大部隊および防御陣地がないことが確認できた。また、午後 2 時頃から激しい降雨と深い霧が原因で展望ができなくなり、偵察が不可能になったため午後 3 時に帰営をはじめた (参謀本部 1914a: 195-196)。

これらのことから、本図は 6 月 1 日の第四軍石田支隊による搜索あるいは 6 月 25 日の第一軍第二師団の掏鹿北部の偵察の際に作成・使用されたと推測できる。

また、本図では、掏 [tao] 鹿を陶 [tao] 鹿と当て